

Title	他動性の消失原理： ノルド語のS型受動を通してみるドイツ語のwerden受動
Sub Title	Prinzipien der Detransitivierung : Deutsches Passiv im Spiegel nordischer Sprachen
Author	鈴木, 直樹(Suzumura, Naoki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.48 (2011.) ,p.179- 201
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	伊藤行雄教授 退職記念号 = Sonderheft für Prof. Yukio ITO
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20110331-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

他動性の消失原理

——ノルド語の S 型受動を通してみるドイツ語の werden 受動——

鈴 村 直 樹

1.

北ゲルマンの言語には不定詞に再帰代名詞由来の接辞 -s を付加した次のような表現がある。

- (1) a. Han skjemmes over det dårlige resultatet.
 (er schämen-sich über das schlechte Resultat)
 彼はひどい結果を恥ずかしく思っている。
- b. Vi møtes i kveld.
 (wir sehen-sich am Abend)
 今晚お会いしましょう。
- c. Jeg synes synd på ham.
 (ich scheinen-sich Sünde auf ihm)
 私は彼を気の毒に思います。

上例は意味的にみて再帰構文 (1a), 相互構文 (1b), 中動態 (1c) であるが, このような表現の中には (2) のように受動を表すものがある。これを S 型受動という。

- (2) a. Engelsk snakkes i mange land.

(Englisch sprechen-sich in vielen Ländern)

英語は多くの国で話されている。

b. Alt skal gjøres.

(alles soll tun-sich)

あらゆることがなされなければならない。

本稿はこのS型受動と werden 受動を比較し、ドイツ語にみられる他動詞から自動詞への変容過程、およびそれと連動する受動態形成を統一的に説明しようとするものである。その際、他動詞と自動詞は連続的なスケールで結ばれ、中間に再帰動詞が介在すると考える。つまり、他動性にはある種のグラデーションがあり、動詞形態はそれに応じて他動詞→再帰動詞→自動詞と変化するが、受動態形成の可否もこの変化と密接に関連していることを想定するのである。以下、本節では歴史的経緯やノルド語固有の言語事情を踏まえ、S型受動の概要をみる。第2節ではノルウェー語の forkjôle/forelske とドイツ語の erkälten/verlieben の振舞いをもとに、「他動詞が再帰動詞へ変容し、人称受動の形成が困難になるプロセス」を観察する。さらに、第3節で「再帰動詞が自動詞へと変容し、非人称受動が形成されていくプロセス」を追い、最終的に「他動性の消失原理」を提案する。なお、議論が過度に複雑化しないように、現象説明そのものはノルウェー語の例文を中心に行う。デンマーク語とスウェーデン語の例は必要に応じて提示する。また、アイスランド語はS型受動を持たず、フェーロー語は入手可能なデータが少ないため、ともに本稿では扱わない。

まず、はじめにS型受動の発展過程を確認しておこう。そもそもS型の動詞が最初に現れたのは古ノルド語期だと考えられている。概ね8世紀から14世紀頃のことである。正確な時期や経緯にはなお不明な点が多くないが、元来3人称対格の sik (縮約形 -sk) が (3) のように与格支配の動詞と結合している例、および (4) のように3人称以外の主語と共

起している例から、S型の動詞そのものは遅くとも古ノルド語後期にはある種の形態的独立性を確保していたとみられる。そして、(5)に挙げたような受動表現も、vera (=sein) や verða (=werden) による迂言的な受動ほど一般的ではなかったものの、やはり古ノルド語期には散見されるという (Faalund: 126, 211/Áfarli: 14)。

- (3) verðið þér nú at bjargask við slíkt sem til er. (Brandle: 733)
 (werdet ihr nun zu helfen-sich mit solchem das da ist)
 あなたたちはそこにあるもので自分の身を守らなければならない。
- (4) a. ek skal gíbtask bónda einum. (ebd.)
 (ich soll heiraten-sich Bauer einem)
 私はある農家へ嫁ぐことになっています。
- b. sakask eigi þú. (ebd.)
 (anklagen-sich nicht du)
 自分を責めてはいけませんよ。
- (5) Óláfr [...] fæddisk upp með Sigurði sýr. (Faalund: 126)
 (Olaf [...] ernähren-sich auf mit Sigurd Syr)
 OlafはSigurd Syrと一緒に育てられた。

S型受動はその後、古ノルド語が分化する過程で北ゲルマンの言語に広く浸透していくが、その定着の度合いは必ずしも一様ではなかった。結果、現代語では(6)にみられるように、使用可能な時制が言語ごとに異なっている。まず、スウェーデン語はすべての時制でS型受動を許容する。過去形や完了形(過去分詞)でS型受動を用いるのはスウェーデン語だけである。これがデンマーク語とノルウェー語(リクスモール・ブークモール)になるとほぼ不定詞と現在形に限定され、ノルウェー語(ニューノシュク)とフェーロー語では僅かに不定詞でのみ可能となる。アイスランド語にも-skと同語源の-stを付加した動詞があるが、ほとんどは中動態

や再帰動詞で、生産的な受動表現ではない。この意味で現代アイスランド語はS型受動を持たない。強い言語変化に晒されず、古形をよく保持するといわれるアイスランド語にS型受動がみられないというのは、その発展過程を考えるうえで興味深い事実である。

(6) S型受動を許容する時制 Askedal 2009: 39

	infinitive	present	preterit	supine
Swed.	+	+	+	+
Dan.	+	+	+ / -	-
Norw.RMBM	+	+	-	-
Norw.NN	+	-	-	-
Far.	+	-	-	-
Icel.	-	-	-	-

S型受動がこのような制約を伴うのに対して、迂言的なBli型受動(= werden 受動に相当)には時制的な制限はみられない。デンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語とも、Bli型受動はすべての時制で形成可能である。また、意味の面でも両者は完全に等価ではない。例えばノルウェー語の場合、話し言葉でよく用いられ、個別の事柄を表すことが多いBli型に対して、S型は文語的色彩が強く、法律文や説明書、また反復的・習慣的な事態の描写に使われるとされる。

(7) a. Disse E-bøkene kan bli solgt.

(Diese E-Bücher können werden verkauft)

これらの電子書籍は誰かに買われるかもしれない。

b. Disse E-bøkene kan selges.

(Diese E-Bücher können verkaufen-sich)

これらの電子書籍は販売してよい。

しかし、こうした時制制約や意味上の差を除き、構造的な観点からすれば、S型受動はBli型受動と対等の独立した受動表現であると考えられる。まず、S型受動にはBli型受動と同様にav (= von)句が現われ [= (8)], 動作主の存在が常に含意される [= (9)]。さらに、S型受動は他動詞からも自動詞からも形成され [= (10)], 二重目的語を伴う動詞では原則として与格をも対格をも主語にできる [= (11)]。こうした事実、および受動表現として確立された後の時間経過に鑑みれば、現代ノルド語におけるS型受動はBli型受動と、それゆえ werden 受動とも平行的な価値を持つものとみて差し支えない。

- (8) a. SAS skal bli kjøpt av Lufthansa.
(SAS wird werden gekauft von Lufthansa)
- b. SAS skal kjøpes av Lufthansa
(SAS wird kaufen-sich von Lufthansa)
スカンジナビア航空はルフトハンザに買収されるだろう。
- (9) a. *Steinen ruller ut på vegnen for å stoppe trafikken. (Åfarli: 16)
(der Stein rollt aus auf den Weg um zu stoppen den Verkehr)
その石は車の往來を妨げるために、(自然に) 道路へ転がっていく。
- b. Steinen blir rullet ut på vegnen for å stoppe trafikken. (ebd.)
(der Stein wird gerollt aus auf den Weg um zu stoppen den Verkehr)
その石は車の往來を妨げるために、(何者かによって) 道路へ転がされる。
- c. Steinen rulles ut på vegnen for å stoppe trafikken. (ebd.)
(der Stein rollen-sich aus auf den Weg um zu stoppen den Verkehr)
その石は車の往來を妨げるために、(何者かによって) 道路へ転がされる。

- (10) a. Kommentarene blir lest. / Kommentarene leses.
 (die Kommentare werden gelesen / die Kommentare lesen-sich)
 コメントが読まれる。
- b. Det blir pratet. / Det prates.
 (es wird geplaudert / es plaudern-sich)
 みんながおしゃべりしている。
- (11) a. Jon blir gitt ei fele. / Jon gis ei fele. (Åfarli: 17)
 (dem Jon wird gegeben eine Geige / dem Jon geben-sich eine Geige)
 Jon にバイオリンが与えられる。
- b. Ei fele blir gitt Jon. / Ei fele gis Jon. (Åfarli: 18)
 (eine Geige wird gegeben dem Jon / eine Geige geben-sich dem Jon)
 バイオリンが Jon に与えられる。

ここでS型とBli型以外の受動形式に目を向けてみると、ドイツ語に werden 受動以外の形式が存在するように、ノルド語にも受動を表現する別の方策がある。以下、(12a)は sein + 過去分詞、(12b)は man を主語とする文、(12c)は lassen sich に相当する構造、(12d)はいわゆる bekommen 受動である。

- (12) a. Nye skoler er bygd her.
 (neue Schulen sind gebaut hier)
 新しい学校がここに建設される。
- b. Man sier at isen smelter rundt Nordpolen.
 (man sagt dass das Eis schmilzt um den Nordpol)
 北極の氷が溶けていると言われている。
- c. Slike ting lar seg ikke bevise.

(solche Sachen lassen sich nicht beweisen)

そのようなことは証明され得ない。

d. Jeg skal få timeplanen sendt på mail.

(ich werde bekommen den Stundenplan geschickt per Mail)

私は時間割をメールで送ってもらう。

S型およびBli型に加え、こうした別形式が存在するという事実は、結局のところ、ノルド語が西ゲルマン語よりも受動ツールを一つ余分に備えていることを意味している。しかし、このツールの多さは必ずしも使用頻度の高さに直結するものではない。例えば、表(13)はLaanemets(2009)が行ったS型とBli型の頻度調査の結果であるが、ここからすると受動態は、ノルド語においても書き言葉で多用され、話し言葉では少ない。また、デンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語の間に有意な差も認められない(ただし、(6)でみたように各言語には固有の時制制約があり、それに応じてS型とBli型の出現比率は異なる)。さらに、これをBiber et al.(1999)の英語のデータ(14)と比較すると、書き言葉と話し言葉に現われる受動態の頻度のみならず、その割合までほぼ等しいことが分かる。つまり、S型とBli型を合わせた受動態が能動態に対して持つ比率は、英語のBe型受動が能動態に対して持つ比率とほぼ等しいのである。ノルド語の動作受動がS型とBli型の総和から形成されていることを示唆する値である。

(13) ノルド語に出現する受動態の割合 Laanemets: 156

	written language			spoken language		
	% passive	finite verb	passive	% passive	finite verb	passive
Danish	10.8%	4,028	434	1.5%	182,927	2686
Norwegian	10.8%	4,015	432	0.8%	134,409	1043
Swedish	12.9%	4,029	520	1.2%	72,632	907

(14) 英語に出現する受動態の割合 Biber et al.: 476

- a. Passives account for c. 15% of all finite verbs in news.
- b. Passives account for only c. 2% of all finite verbs in conversation.

以上、本節ではS型受動の歴史的経緯と現在の状況を概観した。S型受動とはすなわち、古ノルド語期に出現し、徐々に北ゲルマンの言語に定着した形式で、現代語における分布は言語ごとに異なっている。しかし、構造的には受動態そのものであり、頻度的にもBli型とあわせてノルド語の動作受動の根幹を成すものである。また、S型受動がそのような存在であるがゆえに、それをwerden受動と比較しようとする本稿の試みにも、相応の正当性が与えられるものと思われる。以下、次節ではまず状態再帰を形成する動詞の振舞いから他動性が失われていくプロセスを観察する。そのための重要な前提は、Bli型を許容する動詞は、通常、S型をも同じように許容するという事実である。例えば、(15)を考えてみよう。(15)はpresentere (= präsentieren)を使ったBli型、S型、形式主語のdet (= es)を伴うBli型、およびそのS型であるが、典型的な他動詞はこれらをすべて形成する。

- (15) a. Mange nye synspunkter blir presentert i denne boken.
(viele neue Gesichtspunkte werden präsentiert in diesem Buch)
- b. Mange nye synspunkter presenteres i denne boken.
(viele neue Gesichtspunkte präsentieren-sich in diesem Buch)
- c. Det blir presentert mange nye synspunkter i denne boken.
(es werden präsentiert viele neue Gesichtspunkte in diesem Buch)
- d. Det presenteres mange nye synspunkter i denne boken.
(es präsentieren-sich viele neue Gesichtspunkte in diesem Buch)
- この本には多くの新しい観点が紹介されている。

2.

S型受動の可否から観察される興味深い現象のひとつに、いわゆる状態再帰を作る動詞の振舞いがある。ここではまず「風邪を引く」を意味するノルウェー語の再帰動詞 *forkjôle seg* をみる。(16) に示すように、この動詞はドイツ語の *erkälten* や *verköhlen* と同様に再帰用法のみを持ち、他動詞用法を持たない。しかし、ドイツ語と異なり、受動態を形成する [= (17)]。

- (16) a. I en slik kulde er det lett å forkjôle seg.
(in einer solchen Kälte ist es leicht zu erkälten sich)
そんな寒さの中にいたらすぐに風邪を引いてしまう。
- b. *Den kulden forkjølet ham.
(die Kälte erkältete ihn)
その寒さが彼に風邪を引かせた。
- (17) a. I en slik kulde kan man lett bli forkjølet.
(in einer solchen Kälte kann man leicht werden erkältet)
そんな寒さの中にいたらすぐに風邪を引いてしまう。
- b. *In einer solchen Kälte wird man leicht erkältet.

では、すべての受動態が可能かという点、(18) に示すように、S型、det に導かれる Bli 型、det に導かれる S型は許容されない。(15) でみた典型的な他動詞と異なり、いくつかの受動態が欠けているのである。

- (18) a. *I en slik kulde kan man lett forkjøles.
(in einer solchen Kälte kann man leicht erkälten-sich)
そんな寒さの中にいたらすぐに風邪を引いてしまう。
- b. *Det kan også bli forkjølet hunder.

(es können auch werden erkältet Hunde)

犬も風邪を引く。

- c. *Det kan også forkjøles hunder.

(es können auch erkälten-sich Hunde)

犬も風邪を引く。

この Bli 型受動には場合により動作主が出現する [= (19a)]。しかし、その動作主を主語とする他動詞文は不可である [= (19b)]。さらに、動作主の代わりに「av+原因となる出来事」が現れることがあるが、それを det (= es) + å (= zu) 不定詞で他動詞化することはできない [= (20)]。

- (19) a. Hun ble forkjølet av luftkondisjoneringen.

(sie wurde erkältet von der Klimaanlage)

彼女はエアコンで風邪を引いてしまった。

- b. *Luftkondisjoneringen forkjølet henne.

(die Klimaanlage erkältete sie)

エアコンが彼女に風邪を引かせた。

- (20) a. Hun ble forkjølet av å være våt på bena over tid.

(sie wurde erkältet davon zu sein nass auf Beinen stundenlang)

彼女は長時間、足が濡れたままだったので、風邪を引いてしまった。

- b. *Det forkjølet henne å være våt på bena over tid.

(es erkältete sie zu sein nass auf Beinen stundenlang)

長時間、濡れた足のままでいたことが、彼女に風邪を引かせた。

これに対して、ドイツ語の sich erkälten では、行為者のみならず、原因を表す出来事さえも生起が困難である。(21a) のように少なくとも von 句は不可で、durch 句は容認される場合もあるが [= (21b)], 一般的に文

法性は高くない [= (21c)]。

- (21) a. *Er hat sich von seiner Mutter/von kaltem Regen erkältet.
 b. Er hat sich durch seine eigene Dummheit erkältet.
 c. ??Er hat sich (dadurch) erkältet, 2 Stunden in der Kälte gestanden zu haben.

こうした事実からすると、sich erkältenはforkjôle segに比べ、他動性をより消失しているといえる。他動詞としての用法を失い、もっぱら再帰動詞として用いられているのである。さらに、同じ現象を別の動詞で確認してみよう。次例は「恋をする」を意味するforelske segとsich verliebenの対比である。この動詞も再帰的にのみ用いられ、他動詞用法を持たない [= (22)]。受動態はdetを伴わないBli型に限って形成される [= (23)]。動作主はforkjôle segの場合と異なり、出現しない [= (24)]。前置詞句は「av + 原因となる出来事」であれば可能だが、それをdet (= es) + å (= zu)不定詞で書き換えることはできない [= (25)]。そして (26) にみるように、これがドイツ語のsich verliebenの場合、動作主が現れないことはもとより、原因となる出来事さえ生起しないのである。

- (22) a. Hva skjer når man forelsker seg i en vampyr?
 (was geschieht wenn man verliebt sich in einen Vampir)
 吸血鬼に恋をしてしまったらどうなるだろう。
 b. *Hennes skjønnhet forelsket ham i den jenta.
 (ihre Schönheit verliebt ihn in das Mädchen)
 彼女の美しさが、彼に、その娘に恋をさせた。
 (23) a. Hva skjer når man blir forelsket i en vampyr?
 (was geschieht wenn man wird verliebt in einen Vampir)
 吸血鬼に恋をしてしまったらどうなるだろう。

- b. *Hva skjer når man skal forelskes i en vampyr?
(was geschiet wenn man soll verlieben-sich in einen Vampir)
吸血鬼に恋をしてしまったらどうなるだろう。
- c. *Det kan ofte bli forelsket unge mennesker i utlandet.
(es können oft werden verliebt junge Menschen ins Ausland)
若者が外国にあこがれるのはよくあることだ。
- d. *Det kan ofte forelskes unge mennesker i utlandet.
(es können oft verlieben-sich junge Menschen ins Ausland)
若者が外国にあこがれるのはよくあることだ。
- (24) *Han ble forelsket i den jenta av hennes skjønnhet.
(er wurde verliebt in das Mädchen von seiner Schönheit)
彼はあまりの美しさに、その娘に恋をしてしまった。
- (25) a. Han ble forelsket i den jenta av å sitte ved siden av henne helt tilfeldig.
(er wurde verliebt in das Mädchen davon zu sitzen neben ihm ganz zufällig)
彼は、たまたま隣に座ったことから、その娘に恋をしまった。
- b. *Det forelsket ham i den jenta å sitte ved siden av henne helt tilfeldig.
(es verliebte ihn in das Mädchen zu sitzen neben ihm ganz zufällig)
たまたま隣に座ったことが、彼に、その娘に恋をさせた。
- (26) a. *Er hat sich von ihrer Schönheit in das Mädchen verliebt.
b. ??Er hat sich (dadurch) in das Mädchen verliebt, zuällig neben ihm zu sitzen.

これらの現象をまとめると次のようになる。

(27)

	transitive verben forkjôle/forelske erkälten/verlieben		
他動詞用法	○	×	×
再帰用法	○	○	○
Bli(または werden)受動	○	△	×
S(または werden)受動	○	×	×
Av(または von)+動作主	○	△	×
Av(または von)+出来事	○	○	△

受動態形成の可否を典型的な他動詞と比較すると、forkjôle/forelske は他動性をいくぶん失っており、erkälten/verlieben ではそれがほぼ完全に消失していることが分かる。そして、他動性の消失と連動して、受動態あるいは受動態を構成する句の出現が抑えられていくのである。さらに興味深いことに、ノルウェー語が持つこの性質はデンマーク語やスウェーデン語にも共有されている。まず、デンマーク語の forkøle/forelske も、スウェーデン語の förkyla/förälska も、再帰用法のみを持ち [= (28)]、他動詞用法を持たない [= (29)]。受動態は形式主語を伴わない迂言型に限って形成される [= (30)~(32)]。動作主は forkøle/förkyla でのみ生起し、forelske/ förälska では出現しない [= (33)]。前置詞句は「af/av + 原因となる出来事」であればほぼ可能だが [= (34)]、それを形式主語 + 不定詞で他動詞化することはできない [= (35)]。(以下、文末の [D] はデンマーク語、[S] はスウェーデン語を表す。和訳は既出の例文と同意の場合は省略し、新出のものについてのみ記載する。)

- (28) a. Hvad sker når man forelsker sig i en vampyr? [D]
 b. Vad sker når man förälskar sig i en vampyr? [S]
 (was geschiet wenn man verliebt sich in einen Vampir)
 c. ?I en sådan kulde er det let at forkøle sig. [古形] [D]

- d. I en sådan köld är det lätt at förkyla sig. [S]
(in einer solchen Kälte ist es leicht zu erkälten sich)
- (29) a. *Hendes skønhed forelsket ham i den pige. [D]
b. *Hennes skønhed förälskade honom i den flickan. [S]
(ihre Schönheit verliebt ihn in das Mädchen)
c. *Den kulde forkølet ham. [D]
d. *Den kölden förkylde honom. [S]
(die Kälte erkältete ihn)
- (30) a. Hvad sker når man bliver forelsket i en vampyr? [D]
b. Vad sker når man blir förälskad i en vampyr? [S]
(was geschieht wenn man wird verliebt in einen Vampir)
c. I en sådan kulde kan man let blive forkølet. [D]
d. I en sådan köld kan man lätt bli förkyld. [S]
(in einer solchen Kälte kann man leicht werden erkältet)
- (31) a. *Hvad sker når man skal forelskes i en vampyr? [D]
b. *Vad sker når man blir förälskas i en vampyr? [S]
(was geschieht wenn man verlieben-sich in einen Vampir)
c. *I en sådan kulde kan man let forkøles. [D]
d. *I en sådan köld kan man lätt förkylas. [S]
(in einer solchen Kälte kann man leicht erkälten-sich)
- (32) a. *Der kan ofte blive forelsket/forelskes unge mennesker i udlandet. [D]
b. *Det kan ofta bli förälskad/förälskas unga människor i utlandet.
[S]
(es können oft werden verliebt/verlieben-sich junge Menschen ins Ausland)
c. *Der kan også blive forkølet/forkøles hunde. [D]
d. *Det kan också bli förkyld/förkylas hundar. [S]

(es können auch werden erkältet/erkälten-sich Hunde)

- (33) a. *Han blev forelsket i den pige af hendes skønhed. [D]
 b. *Han blev förälskad i den flickan av hennes skönhet. [S]
 (er wurde verliebt in das Mädchen von seiner Schönheit)
 c. Hun blev forkølet af luftkonditioneringen. [D]
 d. Hon blev förkyld av luftkonditioneringen. [S]
 (sie wurde erkältet von der Klimaanlage)
- (34) a. Han blev forelsket i den pige af at se hendes smukke øjne. [D]
 (er wurde verliebt in das Mädchen davon zu sehen seine schönen Augen)
 彼は彼女の美しい目を見て、彼女に恋をしてしまった。
 b. ??Hon blev förälskad i den pojken av att se honom springa. [S]
 (sie wurde verliebt in den Jungen davon zu sehen ihn springen)
 彼女は彼が走っている姿を見て、彼に恋をしてしまった。
 c. Hun blev forkølet af at have våde ben. [D]
 (sie wurde erkältet davon zu haben nasse Beine)
 彼女は長時間、足が濡れたままだったので、風邪を引いてしまった。
 d. Han blev förkyld av att ha suttit på den kalla stenen. [S]
 (er wurde erkältet davon zu haben gesessen auf dem kalten Stein)
 彼は冷たい岩の上に座り続けたことで、風邪を引いてしまった。
- (35) a. *Det forelsket ham i den pige at se hendes smukke øjne. [D]
 (es verliebte ihn in das Mädchen zu sehen seine schönen Augen)
 b. *Det förälskade henne i den pojken att se honom springa. [S]
 (es verliebte sie in den Jungen zu sehen ihn springen)
 c. *Det forkølet henne at have våde ben. [D]
 (es erkältete sie zu haben nasse Beine)

- d. *Det förkylde honom att ha suttit på den kalla stenen. [S]
 (es erkältete ihn zu haben gesessen auf dem kalten Stein)

こうした事実からすると、ノルド語とドイツ語の受動態形成に関して次のようなプロセスが想定されるのではないだろうか。

(36)

Transitivität	X act Y	→	X act (Y)	→	---
Reflexivität	X act X	→	X act X	→	X act X
Passivform	personal	→	△	→	*
	[waschen]		[forkjôle seg]		[sich erkälten]

上図 (36) の左欄は X が Y に何らかの行為を行うという典型的な他動詞で、X が X 自身にその行為を行うという再帰用法をあわせ持つ。例えば、waschen のような動詞がこれにあたり、こうした動詞ではノーマルな人称受動が形成される。この段階から他動性がいくぶん消失して、再帰用法だけが残ったものが中央欄である。このとき人称受動は完全には形成されず、可能な受動形式は制限される。これが forkjôle seg である。前述のように、forkjôle seg は迂言型の受動だけを形成し、それ以外の構造を許容しない。ここからさらに他動性が消失し、もっぱら再帰用法のみになると、人称受動はまったく形成されなくなる。これが右欄の sich erkälten である。つまり、他動性と人称受動には相関関係があり、他動性消失の度合いが強まるにつれて、動詞形態は他動詞から再帰動詞へと移行し、人称受動は徐々に非文法的になるのである。

3.

他動性の消失過程を描いた (36) は、典型的な他動詞と状態再帰を形成する動詞との間にいわば中間的な動詞を想定したものであるが、状態再

帰を軸にみたとき、他動詞側にそのような中間物があるならば、自動詞側にも何らかのグラデーションが存在して不思議ではない。そして、waschen から forkjôle seg を経て sich erkälten へ至る過程で目的語が弱化したことを思えば、グラデーションの次なる段階は再帰性の消失である可能性が高い。状態再帰のさらに先に、再帰代名詞が目的語としてのステータスを失い、純粋な自動詞へ接近するプロセスがあるのではないだろうか。まず、(37) を考えてみよう。

- (37) a. *Er wurde erkältet/verliebt.
 b. ??Da wurde sich nur erkältet/verliebt.

再帰用法のみを残す動詞が受動態を形成しないことは(36)に示した通りであるが、事実、erkälten や verlieben は人称受動のみならず、非人称受動をも許容しない [= (37)]。では、再帰動詞は受動態をいっさい形成しないかという点、非人称受動ならば可能というケースがある。例えば、(38)がそうである。これらはドイツ語本来の受動態形成からすれば破格であるが、実際の言語運用では少なからず観察される。規範的な Duden も「あまねく許容されるわけではない (nicht von allen als korrekt akzeptiert)」と但し書きを付したうえで、その存在を認めるところである (Duden : 553f.)。

- (38) a. Da wurde sich tapfer geschämt.
 b. Dabei wurde sich stark an der lateinischen Grammatik orientiert.
 (Hundt:161)
 c. Bei uns wird sich mit Händen und Füßen gegen Professionalität gewehrt. (Hundt: 162)
 d. ... wird sich aber noch ordentlich gegruselt. (Oya: 237)
 e. Da wird sich unterhalten, Watten oder Schafkopfen gespielt.
 (Duden: 554)

f. Usingen ist die Stadt, der sich erinnert werden soll. (ebd.)

結論から言えば、(38) のような文では再帰動詞がいわば一つの自動詞として再分析されている。つまり、[sich schämen] や [sich orientieren] の sich がもはや格を持つ代名詞と認識されず、あたかも schämen や orientieren という単一動詞が存在する感覚で受動態が形成されるのである。こうした再分析はこと再帰動詞に限った現象ではなく、他の受動文にも観察される。例えば、(39) では Karten が複数であるにもかかわらず動詞が wird となっているが、これも [Karten spielen] が自動詞と認識された結果である。

(39) Hier wird Karten gespielt, oder einfach nur zusammen angestoßen.

では、再分析とはどのように行われるのであろうか。仮に再帰動詞を自由に自動詞とみなすことができるとすれば、再帰動詞による非人称受動はもっと生産的であってよい。しかし、事実はそうではない。だとすれば、そこには何らかの制約が働いているはずである。再帰動詞のなかには、自動詞と認識されやすいものと、されにくいものがあるのではないだろうか。

(40) a. Ich hörte, wie (sich) jemand davonschlich.

b. Ich hörte, wie *(sich) jemand entfernte.

(41) a. Nach dem Essen ruhte er (sich) gern eine Stunde aus.

b. Von der Krankheit erholte er *(sich) gut.

上例は類似の意味を持つ再帰動詞のペアを使って当該の再帰代名詞の義務性をみたものである。「去る、姿を消す」を意味する (40) では、davonschleichen が伴う sich が随意的であるのに対して、entfernen のそれは義務的である。同様に「休む、休養する」を意味する (41) では、

ausruhen の再帰代名詞は省略可能であるが, erholen では必須である。そして, このペアから非人称受動を作ると, (42)(43) にみられるように, sich が随意的な動詞のほうが明らかに文法性が高い。つまり, 再帰代名詞を省略できる動詞は, それを省略できない動詞よりも非人称受動を形成しやすいのである。

- (42) a. In der Dunkelheit wurde sich nur davongeschlichen.
 b. ??In der Dunkelheit wurde sich nur entfernt.
- (43) a. Nach dem Essen wurde sich eine Weile ausgeruht.
 b. ??Von der Krankheit wurde sich gut erholt.

ここで再び (38) の例文をみていただきたい。これらの sich はすべてが省略可能というわけではない。しかし, (44) や (45) にみられるように, 少なくとも随意的な再帰代名詞を伴う動詞はそうでない動詞よりも非人称受動を許容しやすいものと思われる。代名詞が随意的ということは, 目的語としての重要度が低いということである。また, 実際に sich が欠落してしまえば, その動詞は形態的に自動詞となる。再帰代名詞のこうしたステータスの消失が再分析へとつながるのではないだろうか。

- (44) a. Er hat (sich) auf der Gesellschaft gelangweilt.
 b. Am Sonntag will ich (mich) endlich einmal ausschlafen.
- (45) a. Auf der Gesellschaft wurde sich nur gelangweilt.
 b. Da wurde sich nur ausgeschlafen.

さらに, 次の例を考えてみよう。大矢 (2008) によれば, ドイツ語の他動詞は非人称受動を許さないが, sich が相互の読みになるときに限り, (46) のような非人称受動を形成する。結果, (46) は「お互いに憎み合う・殴り合う」という解釈しか持たず, 「自分自身を憎む・殴る」という

読みにはならない。つまり、再帰代名詞に対格目的語の機能があると、まさに対格が存在するという理由から非人称受動は形成されないが、相互的な解釈を受けると目的語の重要度が弱まり、全体が自動詞と認識されて非人称受動が可能になるのである。

- (46) a. Jetzt wird sich nicht gehasst. (大矢 : 15)
 b. Hier wird sich nicht geprügelt! (ebd.).

さらに、相互代名詞そのものの義務性をみると、例えば英語では相互的な意味を内包する動詞でそれを省略することができる [= (47)]。

- (47) Anna and Bob met (each other) in Cairo. (Quirk et.al.: 364)

このような現象はどれも相互代名詞が目的語として「軽く」、多分に非名詞的であることを示唆している。再帰動詞から非人称受動が形成されるケースとして、ドイツ語ではしばしば (48) のような例が挙げられるが、これらが自動詞として再分析されやすい背景には、相互代名詞のこうした非名詞性が関与しているものと思われる。

- (48) a. Jawohl, da wird sich geherzt. (Hundt: 162)
 b. Dann wird sich natürlich gegenseitig ausgeholfen. (ebd.)
 c. So wurde sich gegenseitig in der Gruppe geholfen. (Duden: 554)
 d. Da wurde sich immer freundlich begrüßt.

(37)～(48) にみた再帰代名詞と相互代名詞の振舞いを考え合わせれば、前節で提案した (36) は最終的に (49) のような原理にまとめられる。

(49) 他動性の消失原理

Transitivität	X act Y	→	X act (Y)	→	---
Reflexivität	X act X	→	X act X	→	X act X → X act (X) → X act
Passivform	personal	→	△	→	* → △ → impersonal
	[waschen]		[forkjôle seg]		[sich erkälten] [(sich) ausruhen] [ausruhen]

上図の左端は典型的な他動詞で、他者 Y へ働きかける他動的な意味と、自身 X へ働きかける再帰的な意味を持ち合わせている。ここではノーマルな人称受動が形成される。右へ一つ進んだところには、forkjôle seg や forelske seg が位置しているが、こうした動詞では他者への働きかけが弱まり、それに応じて人称受動の形成が制限される。これが中央欄の sich erkälten になると、他動性は完全に消失し、再帰用法のみが残されている。受動態はこの段階ではいっさい形成されない。ここは他動性の消失に伴う人称受動の終点であり、同時に再帰性の消失に伴う非人称受動の起点でもある。さらに右には再帰代名詞が随意的、もしくはその目的語としてのステータスが弱い動詞が位置している。例えば、(sich) ausruhen や (sich) helfen である。これらの動詞は表面的には再帰動詞であるが、認識としては自動詞に近く、sich erkälten に比べると非人称受動を形成しやすい。そして、右端は再帰性の消失がさらに進み、当該の動詞が完全に自動詞化した段階である。ここでは通常の名詞受動が形成される。

以上、本稿では S 型受動、Bli 型受動、werden 受動の比較を通して、他動性の消失と受動態形成の可能性を概観し、最終的に (49) の原理を提案した。ドイツ語的な視点からすれば、ノルド語の再帰動詞が人称受動を形成するという事実を理解することは難しく、逆にノルド語的な視点からすれば、なぜ forkjôle は Bli 型受動のみが許されて、S 型受動が許されないのかを説明するのは困難である。本稿で提案した他動性の消失原理がこうした現象を把握するための一助となることを期待したい。

Literatur

- Askedal, J. O. (1982): Grammatische Systemgewinnung und Fremdsprachenunterricht: Zur Systematik der Passivkonstruktionen im Deutschen und Norwegischen. Richtlinien für eine konfrontative Analyse (Kurzfassung). IN: DAAD (Hg.): Deutsch als Fremdsprachenphilologie in den nordischen Ländern. Tagungsbeiträge eines nordischen Germanistentreffens. 110–114. Bonn-Bad Godesberg, DAAD.
- Askedal, J. O. (1989a): Nominalglieder und Passiv im Deutschen und Norwegischen. IN: Buscha J./Schröder J. (Hg.): Linguistische und didaktische Grammatik. 100–111. Leipzig. VEB Verlag Enzyklopädie.
- Askedal, J. O. (1989b): Kontrastiv analyse av passiv i norsk og tysk. IN: Språk og språkundervisning. 4. 19–23.
- Askedal, J. O. (2009): Some general evolutionary and typological characteristics of the Germanic languages. IN: Askedal, J. O., Roberts, I., Matsushita, T., Hasegawa, H. (eds.): Germanic languages and linguistic universals. Amsterdam/Philadelphia. John Benjamins. 7–56.
- Askedal, J. O. (2010): Germanic passive constructions. IN: Askedal, J. O., Roberts, I., Matsushita, T. (eds.): Noam Chomsky and language descriptions. Amsterdam/Philadelphia. John Benjamins. 75–110.
- Biber, D./Johansson, S./Leech, G./Conrad, S./Finegan, E. (eds.) (1999): Longman grammar of spoken and written English. London. Longman.
- Brandle, O. (ed.) (2002): The nordic languages. HSK 22–1. Berlin/New York. Walter de Gruyter.
- Duden (2005): Die Grammatik. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich. Dudenverlag.
- Engdahl, E. (1999): The choice between bli-passive and s-passive in Danish, Norwegian and Swedish. NORDSEM Report 3. ms.
- Engdahl, E. (2000): Valet av passivform i modern svenska.
<http://www.ep.liu.se/ecp/006/007/ecp00607.pdf>
- Engdahl, E. (2009): Working with Scandinavian Corpora. Case study 1: Passives.
http://www.hf.uio.no/tekstlab/phd-kurs_06_09/Engdahl-passive.pdf
- Faarlund, J. T./Lie, S./Vannebo, K. I. (2002): Norsk referansegrammatikk. Oslo. Universitetsforlaget.
- Faarlund, J. T. (2004): The syntax of Old Norse. New York. Oxford University

- Press.
- Hundt, M. (2002): Formen und Funktionen des Reflexivpassivs im Deutschen. IN: Deutsche Sprache 30 (2). 124–166.
- Høyem, S. (1995): Zur Darstellung des Passivs in Helbig/Buschas „Deutscher Grammatik.“ Mit besonderer Berücksichtigung ihrer Verwendbarkeit im Unterricht für norwegische Lerner. IN: Germanistische Linguistik 126. 21–39.
- Laanemets, A. (2009): The passive voice in written and spoken Scandinavian. IN: Groninger Arbeiten zur germanistischen Linguistik. 49. 144–166.
- Lauridsen, O. (1990): The passive and passivizability in Danish and German. IN: Papers and studies in contrastive linguistics. 26. 39–56.
- Lødrup, H. (2000): Exceptions to the Norwegian passive: Unaccusativity, aspect and thematic roles. IN: Norsk Lingvistisk Tidsskrift 18. 37–54.
- 大矢俊明 (2008): ドイツ語再帰構文の対照言語学的研究 ひつじ書房
- Oya, T. (2010): Three types of reflexive verbs in German. IN: Linguistics 48–1. 227–257.
- Quirk, R./Greenbaum, S./Leech, G./Svartvik J. (1985): A comprehensive grammar of the English language. London. Longman.
- Åfarli T. A. (1992): The syntax of Norwegian passive constructions. Amsterdam/Philadelphia. John Benjamins.